

Title	A Passage to India の主題と方法
Author(s)	筒井, 均
Citation	Osaka Literary Review. 1966, 5, p. 29-45
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25826">https://doi.org/10.18910/25826</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## *A Passage to India* の主題と方法

筒 井 均

### I

構成の上から云って完璧の域に達していると思われる *A Passage to India* はその内に多くの問題を含んだ小説である。国籍の異なる人間の友情問題、或は人間個人の友情問題、或は宗教に関する問題、等々である。今、発表後40年余を経た時代に居る私達がこの小説から受ける感銘はどこから生れるのであろうか。私はそれを、作者が以上の種々の問題を取り扱う為に描いた挿話によるテーマの例示と、それを描く方法とにあるとみる。そしてその方法の著しい特徴は、作者の場<sup>①</sup>に対する感受性と、その意味づけにみられると思われる。従って、今私達の為すべきことは、この感覚によってどのように作者が自己の発言を成し遂げたかをみることに、即ちこの感覚の表われ方をみる事により *A Passage to India* における一つのテーマを探ってみることである。

### II

この作品の舞台はもちろんインドである。そして登場人物達と主としてからみあうのもインドである。しかしほんの少し顔をだすにすぎないがこの作品において非常に重要な位置を占めている場がある。それはエジプトであり、ヴェニスである。私は以上の場を、それぞれ否定的な場、肯定的な場と呼ぶ。人間に与える場の感情の意味が、各々否定的、肯定的に扱われているからである。

まづ否定的な場としてインドはどのように描かれているか。インドは異常なるものの存在する土地として描かれている。

第一部第一章は、Angro-India の一地方都市、Chandrapore とその周囲の情景を写しているのであるが、'Except for the Marabar Caves... the city of Chandrapore presents nothing extraordinary' (p.1)<sup>②</sup> の冒頭、'These fists and fingers are the Marabar Hills, containing

the extraordinary caves' (p.3)の結尾から推察できる如く、この鳥瞰図はこれから起る事件の場を提供すると同時に、そこには extraordinary なるものの存在することを私達に示しているのである。このことは第二部第十二章における Marabar Hills の描写に至ってより明瞭になる。この章での描写の中心点は、洞窟を含む Marabar の丘々が太古から存在し、地球上のすべての事象をみてきた存在として在るということである。そしてここでも、'pilgrims, who generally seek the extraordinary, had here found too much of it.' (p.106) にみるように、私達は Marabar の丘や洞窟が異常なるものの存在するものであると認識するのである。第三部は Hindu 教の祭りの描写で始まるが、ここで私達はその混沌とした儀式的進行の内に、異常なるものの類似である 'no taste, no dignity, no form'<sup>⑧</sup> の姿をみるのである。

このように異常な姿として作者に描写されたインドはどのように人間とからみあってくるか。それは、第二部の Marabar 洞窟事件での echo によって示される。

この探検は、to see the real India (p.16) という希望を公言した Adela の為に Fielding が催した Tea Party の席で Aziz によって提案された。探検の当日、まづ Fielding と彼の大学の Godbole 教授が汽車に乗り遅れるところから事件の予感を読者に与える。E. K. Brown はその著 *Rhythm in the Novel* において、この汽車の 'pomper-pomper' という音は洞窟内の echo への序曲だと述べている<sup>⑨</sup>が、蓋し名言である。かくしてインドなるものの象徴である Marabar の丘での echo が聞かれる。

直接 echo を経験するのは新しくインドに來たこの街の長官 Ronny の母 Mrs. Moore と、彼のフィアンセ Miss Adela Quested である。

読者はまづ Mrs. Moore の経験から知らされる。

Mrs. Moore は大勢のインド人と共に最初の洞窟に入る。丸い洞窟は彼らのいきれのため悪臭を放ち、彼女は Adela や Aziz を見失い、はては裸の肌が顔に触れ口のまわりにべったりへばりつく。出口を探そうとして彼女は大勢の人に押され、壁で頭をうち混乱してしまう。そしてその時 echo が起る。同じような単調な音が洞窟全体をどよもし、それは何人もその音を識別することができないような boum-oum に帰してしまう。

(pp. 126—7)

このような echo を聞くのは Mrs. Moore の弱った健康とか老年の為ではない。後述の如く、若くしかも健康である Adela でさえもこの echo を聞くのであるから。Boum-oum という echo は洞窟内に潜んでいるものである。そしてこの echo をひきだしたのが人間である。作者の ‘the cave is stuffed with a snake composed of small snakes, which writhe independently.’ (p. 127) という説明に私達は納得することができる。

Mrs. Moore はこの echo に対しどのように反応するだろうか。

彼女は洞窟から出た後、以後の探検を断念し、英国に残してきた彼女の子女達に手紙を書き始める。しかし、‘Dear Stella, Dear Ralph.’ と書き進むだけで echo が想起され書き続けることができない。そして突然宗教が心に浮ぶがそれも ‘Let there be light.’ (*Gen.*, 1:3) から ‘It is finished’ (*St. John*, 20:30) に至る神の御言葉凡てが boum に帰してしまうように感じる。最後には彼女はこの世のすべてのものに関心を失い、他人との交わりにも、また神との繋がりにさえも虚しさを感じる。(p. 129)

Mrs. Moore はこうして虚無への転落を示すのであるが、これは一体何を物語るのか。私達はその考察に入る前に Adela の echo について調べなければならない。彼女の経験によって洞窟内の echo が外部へと拡がり、直接には echo を経験しなかった Fielding もその echo に接することができ、更にそれによって echo の意味するものがより明瞭になると共に、Mrs. Moore の虚無の意味も歴然としてくるからである。

Adela の洞窟内での経験は Aziz によって暴行されかけたという幻覚である。この幻覚の内容は事件現場では描写されない。読者は、洞窟から駅に戻った一行が Aziz の逮捕に接することでこの事件を知るにすぎない。Adela の幻覚は、法廷の酷暑の中で彼女自身が必死になって事件を反芻する時まで明きらかにされない。彼女はその努力のうちに、Aziz が自分について洞窟に入ってきたということに自信がもてなくなり、結局 ‘I’m afraid I have made a mistake.’ (p. 199) と訴えを取り下げるのである。こうして彼女の ‘to see the real India’ という望みは、Marabar 洞窟内の echo を外に波及させ、英人とインド人との対立を表

面化させるだけに終わってしまったのである。そして彼女は後述する如く英国に re-turn していくのである。

次に私達は、先に少しふれた Fielding の echo に関する経験をみなくなくてはならない。

彼は実際には echo を聞かない。事件直後 Marabar の丘に到着した彼は、一つの洞窟に入ってみるが echo は起らない。(p.136) 彼が経験するのは洞窟の外に及んだ echo である。それはまず Aziz 逮捕の時の人々の狂気の状態に始まる。その場で、'a mass of madness had arisen and tried to overwhelm them all' (p.140) と感じた彼は、その夕方クラブに集まってきた英人達にもその madness を認める。その上 Ronny が Aziz の保釈金を受けとらず裁判に持ち込むとわかった時、Fielding は Ronny と口論し、クラブの会員である事を放棄して部屋をとびでる。その時、Fielding の眼にうつるのが夕暮にうかぶ Marabar の丘であり、それは美しい姿でさえある。だが、その遠景をみているうち彼の心は echo に向かっていく。echo とは？ 彼は知らなかった。しかし、今 Marabar の遠望が美しく迫って来、Marabar が宇宙そのものとなる時、彼は心に何か感ずるものがある。そして自らの生活をふり返り不安になる。彼は何か他の職業につくべきであったのではないかと考える。作者はしかし、'he didn't know at what, never would know, never could know, and that was why he felt sad.' (p.165) と説明し、Fielding の echo を読者に示している。この丘の姿は、Aziz の裁判後、Fielding が Aziz の法外な賠償金要求の気持を知った時再び想い起され、彼は 'he lost his usual same view of human intercourse, and felt that we exist not in ourselves, but in terms of each other's minds.' (p.217) という状態に陥いる。

以上が Fielding に及んだ echo であり、'to travel light' (p.102) という motto を表明し、Adela との会話で 'I see you've all you want.' という彼女に対し、'I think so.' と答える<sup>®</sup> Fielding の唯一の混乱である。

かくして私達はこれらの挿話から echo の意味を探ることができる。

まず第一に、それは場に対する感覚によって捉えられたインドの ex-

traordinary なるもの<sup>①</sup>の表現である。ここでのインドは東洋における一地方というだけにとどまらず、Marabar の丘を含め第十二章での説明の如く宇宙そのものの表象なのである。その宇宙における異常なるものが echo になって現われ、ここでは悪の姿をとって人間世界を脅かし、人間の繋がりを危うくさせているのである。

ここにおいて私達は Mrs. Moore の echo における虚無へ転落の意味を理解することができる。即ち、その虚無は彼女をして一切のものへの繋がりが、神との繋がりにさえも無関心にさせ、彼女の人間関係への虚無を示しているということである。Adela の echo はそれ以上に他への幣害を及ぼし、微妙に平衡を保っていた英印の人間関係を混乱させ、敵対へと向かわしめている。

echo の意味として第二に、私達は、以上の異常なるものによって個人の力の卑小さが示されているのを見ることができる。つまり Adela の echo は hallucination<sup>②</sup>の結果であり、それは彼女の理知の敗北を示す。このことは程度の差こそあれ Fielding に関しても云えることである。そして同じく Mrs. Moore のこの小説における役割を考えると、私達にとってこの echo の一面が明瞭になるであろう。

即ち、彼女はあの echo の後ひたすらインドを去ることばかり考える。そして偶然<sup>③</sup>ある英国婦人の厚意で英国への船の席を入手することができた彼女は、Aziz の裁判が始まる前にインドを離れるのである。第一部において温かい友情を結ぶことができた Aziz の裁判に列席せず。このことは重要である。彼女はその後も Aziz や Adela に、そしてまたインド人達に不思議な力を及ぼすが自らは結局最後まで echo から立ち直ることができなかつたのである。

こういった意味で私達は、echo を ‘the product of the individual consciousness’ という James McConkey<sup>④</sup> や、その muddle の状態を ‘a frustration of reason and form’ と呼ぶ Allan Wilde<sup>⑤</sup> に同意することができよう。先にふれた作者自身の洞窟の描写 ‘the cave is stuffed with a snake’ ということばはここにいたってより明瞭になるだろう。

以上のように *A Passage to India* における場に対する感覚は、インドの、即ち Marabar の洞窟内の、echo によって、第一に宇宙における

人間の繋がりへの不安定さ、第二に個人の理知の力の卑小さを示すものとなった。私はこの場に対する感覚を否定的な感覚と呼んだが、このことは次に肯定的（と私の呼ぶ）な感覚を惹起させる場を考察するよう私達を導く。それが最初に述べたエジプトとヴェニスである。

二つのうちヴェニスが肯定的な場の中心となるのであるが、ヴェニスが描かれる前に二つの準備が描かれる。それは Mrs. Moore の生存の最後の姿であるインドを離れる前の汽車旅行と、Adela のエジプトでの自己発見の姿である。

Mrs. Moore は先述の如く、友人 Aziz の裁判が行われる前に Chandrapore を離れる。それは Ronny の勧めによるためでも、自分の身体のためばかりでもない。彼女の echo のためである。従って彼女の Bombay までの汽車の旅で主として作者が描こうとしたことは次のことである。即ち Chandrapore 以外の街がインドには存在するという事であり、またそれらの街の一つ Asirgah が汽車の進行につれてその位置が変わって見えるという事実の認識である。そして更に重要な事は、そういった事実の認識にも拘らず彼女自身の echo からの脱出は描かれられないという事である。ただインドの丘々が、“echo がインドだと汝は思ったのか、Marabar の洞窟を汝は最後のものと思ったのか” と彼女に笑いかけるだけである。(p. 182)

次にエジプトについて。Mrs. Moore の旅の描写の後裁判が描かれ、それが英国側の敗北に終わった後、Adela は Mrs. Moore と同じコースを英国に向けて旅立つ。その時既に Mrs. Moore は死に、Adela はインドの不安定なものあいまいなものに包まれ、自己の状態を判然と自覚できないでいる。その上 Bombay までついてきた召使い Antony の為、彼女が Fielding の愛人であるという嘘が船中に知らされ、同船の英国人から白眼視され、全くの孤独の旅を続けるのである。しかし船がインド洋を渡り紅海を通してエジプトに近づくと、すっかり景色は変る。美しい白砂が運河の両側岸に見られ、これまでの混乱して不安定であったものをすべて拭き去る。彼女はエジプトに上陸し、アメリカ人の宣教師と言葉を交しているとき、地中海の清澄さの中で突然理解する。自分の英国に戻る (return) 第一の目的が Mrs. Moore の子供達を訪ねることであり、その後彼女自身の仕事につく (turn) のだと。ここに用いられている ‘turn’ と ‘return’

という語は、宣教師が Lesseps の像を指さしながら特別の意味もなくいう言葉 ‘[This celebrated pioneer] turns to the East, he returns to the West.’(p.231) に呼応しているのであるが、作者はここで Adela の向かう方向を暗示すると同時に、ここにインドの、ひいては宇宙の、悪魔的部分が姿を消していくことをも暗示しているといえるだろう。K. W. Gransden もその著 *E. M. Foster* で ‘With A Passage to India it is, indeed, the norm itself which vanishes. (Geographically it vanishes at Suez.)’<sup>⑩</sup> と述べている。

このように Mrs. Moore の旅、Adela の旅により、一つにはインドなるものとは別なものの存在を指摘し、一つにはその別なものが西洋により近い地中海にみられることを指摘した後、作者は Fielding のヴェニスの旅をエジプトから描いている。つまり読者は、インド (Chandrapore) からヴェニスに至るまでを三人の旅によって連続して示されるわけである。そして注意すべき事は、Fielding のヴェニスの旅が第二部の最後の章第三部 Hindu 教の混沌とした祭の描写の始まる直前に挿入されているということである。私達はここに Forster の意図を認める事ができる。

ではヴェニスはどのように描かれるか。

エジプトをすぎ、輝やく青い空と明るい海岸線の Alexandria を通るとき、それらはそれらとは逆の複雑な姿をみせる Bombay を想い起させる。そしてクレタ島の雪を抱いた山の頂がみえた後ヴェニスが現われる。その建築の美が Fielding をとらえ、彼は the beauty of form を idol temples and lumpy hills の中で忘れていたと思い、そして ‘indeed, without form, how can there be beauty?’ と自問する。Fielding はこの地の form の美に改めて感嘆し、若いころのイタリア熱愛を想起しながら次のように想う。

the harmony between the works of man and the earth  
that upholds them, the civilization that has escaped muddle,  
the spirit in a reasonable form, with flesh and blood sub-  
sisting. Writing picture post-cards to his Indian friends, he  
felt that all of them would miss the joys he experienced  
now, the joys of form, and that this constituted a serious  
barrier. They would see the sumptuousness of Venice, not



its shape, and though Venice was not Europe, it was part of the Mediterranean harmony. The Mediterranean is the human norm. (pp.245—6)

このような肯定的な感覚を惹き起す場は何を意味するものなのだろう。作者自身 human norm という言葉で表現しているが、その言葉の持つ意味は先の否定的な場—インド—の異常なるものの意味と対比させるときより判然と私達に示されるであろう。

だがこの対比の考察に入る前に私達は *A Passage to India* 発表迄の諸作品における Forster の場に対する感覚の意味をみておかなければならない。何故なら、その人の過去を知ることによって一人の人間をより深く知ることができるように、この準備によって以上に述べた対比からより深い意味を抽出できるであろうから。

### Ⅲ

K. W. Gransden も述べているように、<sup>⑨</sup> Forster の作品には彼の居たことのある場所がすべて投入されている。そして、Forster は、創作にとって作家の場所が、人間ほどではなくとも、非常に重要なものであると考えていたようである。<sup>⑩</sup> 彼の創作研究に場の意味の研究が大切な所以である。

さて、Forster の場に対する感覚は彼の幼時の経験にまで溯ることができると思われる。自己の過去について余り語らない Forster がわずかながらもその幼年時代について、彼の大叔母に関する伝記 *Marianne Thorton* の終り近くで描いている。<sup>⑪</sup> 私達がこの一節から伺い知ることのできる事は、Herfordshire の家に対する彼の愛情と、英国の自然に対する限りない愛である。そして大切なことは、この書の終りに、大叔母からの遺産のお陰で Cambridge に行くことができ、その終了後旅行をすることができたことを述べ、この事が彼をして創作に向かわしめたと付け加えている事である。<sup>⑫</sup> 私達が今注目していることもまさにこの点である。旅行による場との接触が創作へ導いたこと、即ち Forster の創作にとって場の持つ意味は誠に大きい。Forster が Cambridge での四年目に古典から歴史へと移ったことは、<sup>⑬</sup> この場に対する感覚をより強め、後にその意味づけに重要な役割を果すのである。

この、場に対する感情の意味づけはまず短篇において現われる。数篇の短篇において Cambridge での古典の素養は大きな役割を果しているが、<sup>⑧</sup>今はふれないでここでは場の感覚の意味づけについて考察を進めよう。

短篇における場に対する感覚は自然から生の意味を把握するものとして意味づけられている。例えば *The Road from Colonus* の次の一節をみてみよう。

Others had been before him—indeed he had a curious sense of comradeship. Little votive offerings to the presiding Power were fastened on to the bark—tiny arms and legs and eyes in tin, grotesque models of the brain or the heart—all tokens of some recovery of strength or wisdom or love. There was no such thing as the solitude of nature, for the sorrows and joys of humanity had pressed even into the bosom of a tree. <sup>⑨</sup>

これは人生に疲れ切った老人 Lucas がギリシヤ旅行の際、一寒村で経験する不思議な感情の描写の一節である。宿の前のプラタナスの大木の中からわきでる泉に身をまかせることによって彼はその瞬間生の意味を感じとっていたのである。だから私達はこの一節の後、‘There was meaning in the stoop of the old woman over her work, and in the quick motions of the little pig, and in her diminishing globe of wool.’ (*ibid.*, p.98) と作者が説明するとき素直に納得することができる。このように場に対する感覚は初め生の意味を把握するものとして描かれている。

場が真正に生きんとする者にとって忌むべきもの、恐ろしきものを認めさせるようになるのは *Howards End* においてである。

この作品において、私達は時代の持つ大きな力が人間関係に対して及ぼす悪の姿を見る事ができる。そしてそれは panic and emptiness という語句で示されている。

読者はまずこの作品の冒頭 Helen の手紙で、彼女が Wilcox 家の息子 Paul と恋におちたことを知らされるが、つづいてそれが次のような一節と共に終焉に導かれることを知る。

When I saw all the others so placid, and Paul mad with terror in case I said the wrong thing, I felt for a moment

that the whole Wilcox family was a fraud, just a wall of newspapers and motor-cars and golf-clubs, and that if it fell I should find nothing behind it but panic and emptiness. ⑩

これが場（ここでは時代の力）に対して持った感覚の意味づけである。この感覚は Beethoven の第 5 交響曲をきくときに Helen の抱く感情と同一のものである。作者がこれを Beethoven の偉大さを伝えるものとしていることは重要である。⑪

*Howards End* におけるこのいわば負の感覚ともいえるものは何を意味するか。私はここに時代—産業主義時代—に対する作者の認識（或は姿勢）をみたいのである。金力に頼ってはいるがこの現実に根を下ろしている Wilcox 家の人々を描くことによって、⑫ Forster はこの汚濁の時代に真正に生きるには如何にすべきかを描いたのである。その故に作者は Margaret という、人間との繋がりを最も重要と考える女性をして、Wilcox 家の家長 Henry と結婚せしめているのである。

しかし私は *Howards End* において現実における生の姿を見ることができない。即ち‘場’の範囲が単に時代背景にまでしか踏みこんでいないからである。Forster が初めて場が歴史を持ち、そこに生を送る人間も意識するとせざるを問わず、その‘場’から影響をうけるものであり、それ故に人間の生がいわば風土的歴史的に制約を受けるという事を認識するのは、*Howards End* 発表後 12 年を経た 1922 年に発表された *Alexandria: A History and a Guide* ⑬ においてである。

この書は Forster が第一次大戦中 Alexandria に非戦闘員として滞在したときの、業務の合間に成した研究の成果である。

*Alexandria* において今私達にとって重要なことは、次の Introduction 中の一節にみる感覚である。

And visions kept coming as I went about in trams or on foot or bathed in the delicious sea. For instance, I would multiply the height of the Fort of Kait Bey by four and so envisage the Pharos which had once stood on the same site. At the crossing of the two main streets I would erect the tomb of Alexander the Great. (p. xvi)

引用文中にみられるこのような感覚が Alexandria の過去と現在とを同時に捉えさせたのである。Forster の *Alexandria* における意図が、*Alexandria* という街の the magic and the antiquity and the complexity (p.xv) を理解しようとするものであるという事が、その構成を第一部 A History と、第二部 A Guide にしたのであろう。ここに私は、Forster の場が単に空間をだけにとどまらず、時間をも含みつつあるのを見る。即ち Forster のみる生が次第に宇宙における人間の生へと拡張されつつあるのを認めるのである。

このように過去と現在とを同時に捉えようとする試みはどのような認識に基づくのであろうか。次の二つの引用をみた後考察しよう。

(1) This battered and neglected little peninsula is perhaps the most interesting spot in Alexandria, for here, rising to an incredible height, once stood the Pharos Lighthouse, the wonder of the world. Contrary to general belief, some fragments of the Pharos still remain. But before visiting them and the Arab fort in which they are imbedded, some knowledge of history is desirable.

(2) Of the theatre of this ancient strife no trace remains in Alexandria. Not even Cleopatra's Needle stands there now. But the strife still continues in the heart of men, even prone to substitute the human for the divine, and it is probable that many an individual Christian to-day is an Arian without knowing it. ②

前者は *Alexandria* の第二部の一節で、Pharos 島に昔あったという灯台の叙述に入る前の文章であり、後者は *Alexandria* の翌年発表された *Pharos and Pharillon* 中の一節で 'St. Athanasius' と題する essay の結論の一部である。

私達がこれらの文を読んでまず認めることは、前者において、場はその過去の積み重なりであり、それが現代の人々に或る力を及ぼしているということである。後者において、私達はそういった場との関係を持つ人間自身が意識するとせざるに拘らず過去の人々とも繋がっていると認めるであろう。これが *Howards End* においてはみられなかった人間存在におけ

る風土的歴史的制約という視点である。即ち図式的に云えば *Howards End* の人間が単にその住む時代とのみ関連を持つとすれば、<sup>⑧</sup> *Alexandria* や *Pharos and Pharillon* に描かれる人間は大きな時の流れの中における場に住む人間である。ここに至って人間存在の歴史性が認識されるのである。

以上のような観点からもう一度私達は *A Passage to India* におけるインドとヴェニスとの意味するところを考え直さなければならない。

#### Ⅳ

まづ私達はこれからの考察の準備として、インドに関しても前節にみた人間の風土的歴史的生の観点がみられることを指摘しよう。

*Alexandria* 発表の年に執筆された 'The Mind of the Indian Native State' と題する一文にそれがうかがわれる。Forster は、インドの支配者達の歴史と、そこにみられる mythology を説明しつつ、'The hand of the past divides the rulers whenever they attempt to discuss the present' と述べ、次に支配者と民衆との関係に筆を進め次のように述べる。

And [a prince] understands [his subjects] even when he is indifferent or unjust, because like them he is rooted in the soil. He has an instinctive knowledge which no amount of training or study can give. <sup>⑨</sup>

このような認識のもとに *A Passage to India* は完成されたのである。さて本論に入ろう。

インドの異常なるものの存在とヴェニスの人間規範に属するものとの関係は何か。

私はこの二つの姿が宇宙における人間の生の姿の実相であると思う。即ち、異常なるものとは私達の生の内に潜んでいるものの表象なのであり、人間規範に属するものとは日常の生において常に私達の接しているものの姿なのである。従って echo とは生の背後に身を潜めていたものがこの世に現われた時の姿であり、ここでは悪魔の姿を現わしたのである。そしてその echo を導きだした者がインドとは異なる風土に住み、異なった

過去を持つ人間である Mrs. Moore と Adela Quested なのである。つまりここでの対立（対立と呼ぶのに私はこだわりを感じるのである）は英人対インドなのではなく、生における隠れた相<sup>すがた</sup>の表面化する動きによって起る摩擦なのである。つまりそれはインドなるものの過去と、ヴェニスなるものの過去との対立<sup>⑧</sup>として描かれたのである。これが先に述べた人間の歴史的風土的存在ということの、*A Passage to India* における意味である。

しかしここで私達は二つの反論を予想しなければならない。一つはこの対立が西洋対東洋との対立であるというもの、後<sup>あと</sup>一つはこの対照が human order と divine order との対立であるとの指摘<sup>⑨</sup>である。

第一の反論に対して私は適切な反駁の準備はない。私はただ次のように答え得るだけである。即ち東洋・西洋との指摘だけでは、つまり風土的なものだけでは、この *A Passage to India* という作品は成立しなかったのではあるまいか、もし成り立つとしてももっと早い時期に（つまり14年間の空白がなくて）世に問われたであろう、ということである。Forster はインドの持つ異常なる力を西洋的なものとは異質なものとしてのみこの作品に描こうとしたのではない。ヴェニスにおいて作者が用いている human norm ということばからも推察できる如く、異常なるものと人間規範に属するものとの対比は、Alexandria での生活を経た後にうまれた人間の生の二相の認識表明なのである。繰り返し述べれば、それは日常の生の背後に潜んでいる、作中人物の言葉を借りれば<sup>⑩</sup> 善悪一体となった、或は善悪を越えた宇宙の存在の相と、私達の眼にうつる生の一相との二相である。そういった意味で Dickinson が Forster にあてた手紙の中で指摘する ‘More important is that, whereas in your other books your kind of double vision squints—this world, and a world or worlds behind—here it all comes together.’<sup>⑪</sup> ということばは正しいであろう。

このようにこの作品ではすべて人間の生に視点が集注されている。従って第二の反論は作品の意図をはづれた指摘であろうと思う。成程人間世界を見下ろす空の image は到る処主要な場面に表わされているが、それはしかし人間世界を離れたところに存在するものとして描かれているのでは

ない。またそこに絶対的なものの存在するところとして描かれているのではない。そうではなくて、それは人間世界の卑小さを意識する作者の眼であり、宇宙の中の人間の姿をみつめようとする作者の姿勢の表現である。

さてここでもう一度、この作品の視点と、私達の研究の後をふり返ってみよう。

*A Passage to India* においてはインドというものが、異常なるものとして存在するものとして描かれていた。そしてその力の人間世界への波及は、洞窟内の echo という表現で用いられた。

こういった舞台を持って人間のドラマ——英人とインド人との対立という、いわば政治的色彩を帯びたもの、そしてもう一つ政治を離れて人間個人の結びつきの不可能性のドラマ——が展開された。

そして私達は、このドラマの内含するものが単に人種間の問題にとどまらず、もう一つ高い点から眺められていること、即ち人間の生の宇宙における在り方をドラマとして展開していること、を指摘してきた。そして作者の方法が、彼の場に対する感覚に基づいて成されているという事が付け加えられねばならない。

私達はこうふり返ってみて、さらにここに一つの問題を提起しなければならない。即ちこの宇宙における人間の生という視点から描いた生はどういうものであり、その難点に対する解決法はどうかということである。いかに言えば、*A Passage to India* における What is life? と How to live. の問題である。

What is life? に対しては、以上の考察においてほぼ明きらかになったであろうが、宇宙における人間の窮境を描こうとしたと作者自身述べているように、<sup>⑧</sup> その生とは、人間の理性だけでは対処できないものが生にはあり、人間の繋がりにも歴史的風土的制約の存在するため容易にはうまく成立しない、というそういった生である。そして人間は、法廷で扇を引っぱる裸のインド人のように孤独にその営みを続けなければならないのである。<sup>⑨</sup>

しかし、このような生に対して、*A Passage to India* ではまだ解決策は明瞭に示されていない。<sup>⑩</sup> ただ第三部において Mrs. Moore の子供を登場させ、インドの象徴の如き Hindu 教の祭に興味を抱かせていることに

より、私達はほのかな希望をみるにすぎない。つまり、以上のような生の本質故にこそ、私達は tolerance, sympathy, good temper<sup>®</sup>をもって生に潜む異常なる一面に共に対処していかなければならない、という事である。

以上が Forster のこの書における意図であつたろうと思われる。

### 註

- ① ここでいう‘場’とは、自然、家、社会等、人間が立って居る所を指す。
- ② 以下における頁数は凡て Everyman's edition に依る。
- ③ *The Hill of Devi*, p.170 Hindu 教の祭 Gokul Ashtami に参列した Forster の感想中にある。
- ④ E.K.Brown, *Rhythm in the Novel*, London, 1957, p.99.
- ⑤ *A Passage to India*, p.229. cf. p.217. の引用文。(本文p.40)
- ⑥ *ibid.*, p.207. Adela と Fielding との対話で Adela 自身が告白することば。
- ⑦ Marabar 探検に誰もが熱心になっていなかった事を述べている (Chap.14) 事と偶然という事とは、現実の生を表わすのに適している。
- ⑧ James McConkey, *The Novels of E. M. Forster*, Cornell Univ. Press, 1958, p.149.
- ⑨ Allan Wilde, *Art and Order*, New York Univ. Press, 1964, p.151.
- ⑩ K. W. Gransden, *E. M. Forster*, Oliver and Boyd, Writers and Critics, 1962, p.82.
- ⑪ *ibid.*, p.10:  
‘All these places—Herfordshire, Tonbridge, Cambridge, Surrey, the Mediterranean, Alexandria, India, have entered his writing. He thinks places important, though not as important as people, and the *genius loci* appears in much of his fiction.’
- ⑫ *Aspects of the Novel*, pp.46—7 (Penguin books):  
‘Many novelists have the feeling for place—Five Towns,



Auld Reekie, and so on. Very few have the sense of space, and the possession of it ranks high in Tolstoy's divine equipment. Space is the lord of *War and Peace*, not time'.

- ⑬ *Marianne Thorton*, Edward Arnold, 1956, pp.249—62, 及び pp.267—75.
- ⑭ *ibid.*, p.289. 'travelling inclined me to write'.
- ⑮ L. Trilling: *E. M. Forster*, Toronto, 1959, p.27.
- ⑯ cf. Greece に関する言及が短篇に多い。場に対する感覚もギリシャ神話からの連想が伺われる。Lionel Trilling: *op. cit.*, pp.32—3参照。
- ⑰ *Collected Short Stories*, p.98 (Penguin books)
- ⑱ *Howards End*, p.23. (Edward Arnold uniform ed., 1929)
- ⑲ *ibid.*, p.32.
- ⑳ 彼等をして、その手が all the ropes of life (p.128) にふれていると自覚せしめている。後の Margaret と Henry との結婚を D. H. Lawrence はとがめている。(Letters, 1932, p.552. Quoted in J. B. Beer: *The Achievement of E. M. Forster*, p.196.)
- ㉑ 以下 *Alexandria* と略す。
- ㉒ (1) *Alexandria*, Anchor Book, 1961, pp.144—5.  
(2) *Pharos and Pharillon*, London, 1961, p.50.  
文中 the human, the divine とは, Christ の人性, 神性を指す。また Arian とは Arius 派の人のこと。Arius とは Alexandria の聖職者でキリストの神性を否認した。
- ㉓ *Howards End* の Ruth に関して過去とのつながりが描かれているが, 過去への対し方はいわば憧憬に近い。
- ㉔ *Abinger Harvest*, p.378 (Arnold Pocket edition)
- ㉕ echo による摩擦が, 生の背後にあるものの時の積み重ねと, 表面の時の重なりとの葛藤であるということ。
- ㉖ cf. F. C. Crews: *The Perils of Humanism*, Princeton Univ. Press, 1962, pp.162—3. この書でも human の方に重点がおかれることに注目しよう。
- ㉗ Godbole と Fielding との会話で echo のことが話され, Godbole が good and evil に関係して述べている。pp.153—4.

- ⑳ *G. L. Dickinson*, p.216 (Arnold Pocket edition)
- ㉑ *E. M. Forster, A Tribute, with Selections from his own writings on India*, 1964, p.50. に Rama Rau によって引用されている。
- ㉒ *A Passage to India*, p.200.
- ㉓ Forster が *The Hill of Devi* の 'Notes on *A Passage to India*' (p.155) でこの作品を bad と言っているのは, What is life? を描いて How to live が描けなかったからではあるまいか?
- ㉔ *Two Cheers for Democracy*, p.56. 参照。

※念のため本文中の主要作品の発表年次を記すと次の通りである。

*The Road from Colonus*, 1904 ; *Howards End*, 1910 ; *Alexandria : A History and a Guide*, 1922 ; *Pharos and Pharillon*, 1923 ; *A Passage to India*, 1924 ; *G. L. Dickinson*, 1934 ; *Abinger Harvest*, 1936 ; *The Hill of Devi*, 1953 ; *Marianne Thorton*, 1956 ; 'The Mind of the Indian Native State', 1922.